人格特性の多面性診断(16PF)

この検査は、R. B. Catte が開発した"The Sixteen Personality Factor Questionaire"をプロトタイプとして、その後いくつかの改良が加えられた多尺度人格因子検査について、冗長部分を削除するとともに、わが国の風土・習慣・文化に適合する質問文へと修正を加えております。

第三者に人物を説明するとき、身長や体重は正確に伝えられますし、容姿は写真等をお見せすればすぐわかります。しかし、正確に伝えるのがいちばん難しくて、実際に会ってもよくわからないのが性格とか人格です。「まじめな人で、明るくて……」、といくらお話しても、どれだけ相手の性格を理解して表現しているのか、はなはだ心もとなくなってくるのが実情です。性格をどういう言葉で言いあらわせばいいのか、その答えを与えてくれるのが、**人格特性の多面性診断**です。

性格は多種多様なのに、性格を表わす表現はそんなに多くはありません。無限のものを有限なものに収めるというムリをしているのなら、同じような言葉はひとつにまとめ(言語類型化)、基本的なものだけにしてしまおう、という発想にもとづいて**人格特性の多面性診断**が開発されました。

4000 語以上あるといわれている人格を表わす形容詞の中から、おおよそ 180 語を選択し、そこから因子分析、判別分析などの統計的手法を用い、さらに言語の多様な意味解釈を整理することで、16 の性格の基本要素(尺度)を選びだしました。これによって、人間の人格全体を、ある一定の基準にしたがって測定することが可能となりました。

この**人格特性の多面性診断**の大きな特徴は、性格の 16 要素を表現するのに、専門用語のほかに一般的な言葉を用いていることです。たとえば、「打ち解けるー打ち解けない」、「謙虚ー独断」など、診断結果が一般の方々にもわかりやすい言葉で記述されております。

多尺度人格因子検査の対象となるのは 16 歳以上の成人、主に精神疾患のない人々で、その人格の全体像を概括的に把握するために有用なツールです。**人格特性の多面性診断**には、同質の内容をもったA形式とB形式との2種類があり、どちらか一方だけを実施してもよいし、平行して用いて、その一致度から信頼性を見ることもできます。また、そのほかに職業選択のための簡略版として作成された C 形式と D 形式、さらにより質問を簡略化したE形式などもあります。この**人格特性の多面性診断**では、A形式、B形式、D形式を統合し、妥当性を高めるとともに、職業適性についても尺度に内包化しております。